井伏鱒二「普門院さん」の方法

島津京子

一　「普門院さん」の初出と定本との比較

「普門院さん」は、改造社の『改造文芸』昭和二十四年五月号に発表された。ついで、単行本『試験監督』（昭24・9　文芸春秋新社）に収められた。「昭和二十四年五月十三日（強風の夜）」の日付のある同書の「後記」には、

ここに集録した六篇は、昭和二十三年の春から二十四年の春にかけて、一応みな雑誌に発表したものである。しかし他の自著には、いづれも集録してゐない。

とあるように、『試験監督』が最初の収録単行本である。初出との本文異同はない。その後、どの段階で訂正加筆が加えられたかについては、米田清一氏の「解題」（『井伏鱒二全集』第四巻　筑摩書房　昭和40・1）に次のように記されている。

その後、春陽堂版『現代長篇小説全集第十五巻』（昭和二十八年九月）、角川社版『井伏鱒二作品集第五巻』（昭和二十八年九月）、角川書店旧版『昭和文学全集第三十六巻』、筑摩書房版『新選現代日本文学全集第一巻』（昭和三十三年十一月）等に収録された。諸本の間にはほとんど異同はない。底本としては、筑摩書房版『新選現代日本文学全集』所収のものを用いたが、全集収録に際し、前おきの部分の大幅な削除の他、一、二の字句の訂正があった。

本来ならば、「諸本の間にはほとんど異同はない。」とあるのが、どの程度の訂正なのか調べるべきであるが、今の段階では入手困難な本があるため未調査である。本稿では、「全集収録

に際し、前おきの部分の大幅な削除の他、一、二の字句の訂正があった。」という点について、考察することからはじめたい。以下、『改造文芸』本文を初出と呼び、全集本文を定本と呼ぶことにする。

定本において大幅に削除された「前おき」の部分とは、見知らぬ「四十男」の「彼」が、井伏鱒二とおぼしき「私」に、小栗上野介斬首の話をすることになったいきさつについて書かれている部分である。

去年の五月、青柳瑞穂君の奥さんが亡くなった。（中略）四十九日がすぎてから、たまたま阿佐ケ谷の清仙亭で逢った時にもそんなやうに云つてゐた。ちやうどそこへ、私たち共通の友人の阿部君といふ若い作家が来合せて、禅宗の寺なら阿部君自身の叔父さん（島津注、普門院さんすなわち阿部道山師である）の寺を紹介してもいいと云った。場所は東京近郊、道順は埼玉県の大宮駅下車で、最近に大宮市内に編入された大成村といふところださうである。

これは、ほんの一部分であるが、なぜ「前おき」を削除したのか、削除したことの是非を考えるにあたって、まず、傍線部に注意してみたい。具体的な固有名詞の多用が目立つ。時、人名、場所が具体的に示されている。井伏は、具体的に名詞を並べることによって、身近かな所に案外に「歴史」があることを印象づけたかったのではないだろうか。現在では耳遠い感じもしないことはない小栗上野介斬首事件について見聞したものがいる、つくり話ではないということを印象づけたかったのではないだろうか。だが、固有名詞の多用は、わずらわしい感じがして、作品全体から見ても、この部分だけ浮き上がって見える。瑣末な事（青柳瑞穂夫人の墓所がどこであろうと）を並べたてているだけで、中心の事件と余り関係がないように感じられ、読者から見ると、他人ごとのように感じられる。

「前おき」は、このあと、青柳君と阿部君との会話という形をとって、さりげなく普門院さんと小栗上野介の紹介を入れており、本題への導入となっている。これを受けて、「べつに特長のない風俗で、おだやかな顔つきの四十男」が、普門院さんに「失礼な真似をした顛末」を「私」に語ろうとする。ここまでが、定本で削除されている。

ここでは、「去年の五月」すなわち昭和二十三年現在の井伏、青柳瑞穂、阿部道山の甥の生活している世界と、昭和八年、「四十男」が偶然、普門院さん（阿部道山師）と御隠居の対話をのぞき見している世界と、その対話の向うにある慶応四年小栗上野介斬首事件の世界とを、時間的に、また空間的に関係づけ

ようとする、作者の意図が感じられる。しかし、そうしようとすればするほど、構造が複雑になってくる。これを歴史小説にすれば、ことは簡単だったわけだが、御隠居と普門院さんとの対談を、「四十男」の「彼」がのぞき見し、それを「私」に話すという、三重に間接的な構造になるからである。そのためもあってか、井伏、青柳、阿部道山の甥の生活する世界を一つはずした。

現在私たちが目にする「普門院さん」は、次のような高揚した文句ではじまる。

「私は、この目で、歴史を見たんです。この耳で歴史のなかの人物の声をききました。歴史と現世は、二つの歯車のやうに嚙みあつてゐますね。」

さういふ前置きで、彼はこんなやうな話をした。

初出本文にもこれはあったのだが、前述のような瑣末な生活叙述の間に埋もれがちであった。それが定本では派手な冒頭文として強く印象づけられることになった。

ところで、「さういふ前置きで、彼はこんなやうな話をした。」という一文を、井伏はなぜ削除しなかったのであろうか。この一文を除くならば、「彼」が井伏に語るという間接性を一つはずすことができたはずである。普門院さんと御隠居の対話をのぞき見した「私」が、直接読者に語りかけることになる。構造の間接性はより整理され、文脈上の不都合もないのである。

だが、この一文を削ると、次のようになる。

「私は、この目で、歴史を見たんです。（中略）歴史と現世は二つの歯車のやうに嚙みあつてゐますね。

――私は昭和二年から十三年まで、鍍倉に住んでゐました。ひところ、東京に出て警察万面のことにも関係してゐましたが、半年ばかりで止しました。ちやうど警察の仕事を止した直後、昭和八年の正月四日のことでした。

「私」は普門院さんに盗みの疑いをかけて「あとをつけ」、普門院さんと御隠居の歴史的対話を見聞することになる。これはこれで通じるわけであるが、やはり冒頭の文句の独立性が弱い。「さういふ前置きで、彼はこんなふうな話をした。」という一文を削り残すことによって、前後を画然と区切ることができ、「歴史と現世は二つの歯車のやうに嚙みあつてゐます」という警句が、作品全体の「前置き」として、読者を魅きつける仕組になっている。「彼」が井伏に語るという間接性を残すことになろうとも、やはりこの一文は必要だったのである。

そして、「歴史と現世は二つの歯車のやうに嚙みあつてゐますね。」ということばは、井伏がこの作品の叙述を通して伝え

たい主題の暗示である。初出以来ずっとあった長い「前おき」を大幅に削除することによって、定本では、歴史と現世との嚙みあいを見つめる目をもって、この小説を読み進めてもらいたい、歴史は決して過去のものではなく、現世と結びつけて考えなければならないということを、よりはっきりと読者に示したのである。

次に、全集収録に際しての「一、二の字句の訂正」の問題について見ることにする。

訂正箇所は一、二にとどまらず、ほぼ作品全体に渡っているが、いくつかの場合を除いて、ほとんど文意、文体に影響はない。ここでは、細かい訂正のように見えて、実は微妙に作品の主題にかかわる大事な訂正箇所に目を向けてみたい。

○ 御隠居の話しかたは殆んど無雑作なものでした。老齢といふものは、こんなにも過去の印象を薄らげるものでせうか。もしかしたら、わざと無雑作につくろつてゐるのではないだろうかと思ひました。(初出)

○ 御隠居の話しかたは殆ど無造作なものでした。歳月といふものは、こんなにも過去の刻印を薄らげるものでせうか。いや、わざと無造作につくろつてゐるのではないだらうかと私は思ひました。(定本)

ここで、「老齢」を「歳月」に訂正したことによって、年をとって老いた御隠居個人の問題から、誰にでも平等に過ぎていく「歳月」の問題へ、つまり、罪意識の薄らぎは万人に共通におとずれる普遍的問題となり、読者への問題提起となっている。

「印象」を「刻印」に改めたのもそうである。その人なりに心に残ったことという軽さが消え、定本では、御隠居の心に深く刻みつけられた印という、厳しい響きが感じられる。個人の思い出から、忘れてはならない過去の事件の教訓へと、普遍性をもって、読者に迫ってくるのである。

ここにも冒頭の「歴史と現世は二つの歯車のやうに嚙みあつてゐる」という主題の暗示が響きあっている。この話が単に普門院さんと御隠居だけの個人的な話にとどまらず、この二人の対話を通して、読者自身が歴史とのかかわり方を見つめなければならないのだという、作者の意図が、定本では用字に至るまで、より強く打ち出されているのである。

もう一箇所見てみたい。

○ 小栗の最期は何か暗示的なやうな気がします。それは書いた歴史や表装した額の大文字の真意に対して、疑ひを持たせるといふ点で暗示的だといふ意味です。(初出)

定本では、傍線部「真意」を、「文意」と改めている。

「真意」という語が使われているのは、「普門院さん」の中では、右の例の他に、「打てといふのは、逮捕せよといふ意味ですか、或は斬れといふ意味ですか。岩倉具視総督の真意は、どこにあつたのですか。」（初出、定本とも「真意」）という部分だけである。「岩倉具視総督の真意」というと、当事者の岩倉だけが知っていて、それ以外の人にはわからないもの、推測するしかない曖昧なものである。「真意」は、直接本人が説明でもしない限りはっきりしない。これに対して「文意」は、文章が表わしている内容であるから、文章を理解する能力さえあれば、文章自体が曖昧でない限り、だれでも客観的にその意味を汲み取ることができるもの、ということになる。「書いた歴史や表装した額の大文字の真意に対して、疑ひを持たせる」の「真意」は、やはり「文意」に改めただけのことはあったと思われる。字義曖昧な歴史書に疑いをもっても、それは推測にとどまる。字義明白な歴史書に疑いをもってはじめて、実証的批判となる。我々は、書かれた歴史や表装された額の大文字は正しい、ありがたいもののように思いがちであるが、井伏は、歴史や額の大文字の文意が決して事件の真相をそのまま伝えているのではない、疑いをもつべきだと言っているようである。

二　依拠資料と初出「普門院さん」との比較

次に、「普門院さん」の依拠資料について述べたい。

井伏は、『試験監督』の「後記」において次のように記している。

「普門院さん」といふ作品は、阿部道山師著「小栗上野介伝」によつて書いた。篇中人物の会話の大半は、道山師の文章を殆んどそのまま借用し羅列したものである。しかもモデルは道山師である。名前も実名にさせてもらつた。その意味で、この作品は実話である。無論、私は道山師の許可を得るために、道山師の一族、阿部正二郎君に連絡の労をとつて頂いた。はじめ私は、道山師の文章を借用するに際し、自分の書きいいやうに変型しながら引用しようかと思つた。しかしそれは止した。いづれ私は、上野介の史伝を書きたいと思つてゐるが、いまはそのノートの一部のつもりでこの試作をしてみたのである。道山師と阿部正二郎君に、私の妄を詫びると同時に深甚なる謝意を表したい。

また、『井伏鱒二全集』第五巻月報の「井伏さんから聞いたこと　その五」（伴俊彦）には次のように書かれている。

戦争で徴用された時（島津注、昭和十六年）、一緒の船

に、阿部道山師の甥がいた。拓大出身で、通訳係として赴任するところだったが、快活な明るい青年だった。叔父のことを書いて見ませんかと道山師の「小栗上野介伝」を貸してくれた。道山師と御隠居との問答も殆どそのままで、短篇にするために、それを覗き見する形でまとめた。

右のように、井伏は阿部道山師の「小栗上野介伝」をもとにして書いたとしている。しかし、私の調査によると、この書名は正確ではないと思われる。『海軍の先覚者小栗上野介正伝』（財団法人海軍有終会発行　昭16・10）という書名で、そのうちの「小栗上野介の生涯を語る」の章の、「上野介を斬った原保太郎翁と語る」がもとになっている。それにはさらに「生きてゐた」「原翁と対座」「かうして斬つた」「小栗の駿馬に蹴らる」「首の落つるとき」「原翁晩年の心境」「保太郎翁の死」などの見出し様のものがついており、井伏は「生きてゐた」（一六四頁）から「原翁晩年の心境」（一七七頁）までに拠っている。両者の内容的対応とともに、『海軍の先覚者小栗上野介伝』の刊行が、井伏の徴用の直前であることから考えて、「普門院さん」の依拠資料は同書の「上野介を斬った原保太郎翁と語る」である、と判断してまず間違いないであろう。なお、前節では初出より定本の方が作者の意図が明確に表現されている、改訂は成功であったということを見てきたわけだが、依拠資料と比較するこの節では、「普門院さん」は初出本文を用いる。

「普門院さん」は、井伏が述べているように、「篇中人物の会話の大半は、道山師の文章を殆んどそのまま借用し羅列したもの」ではあるけれども、両者の全体的印象は異なる。それはどこからくるのであろうか。

会話の流れをそのまま踏襲している部分を比較してみよう。

○　話が一寸なくなつたので、翁の足が妙にへんなので、私は先生は足が悪いですかと云ふと、さも、痛い所を問はれたらしかつた。黙言つて、冥想の底だ。（「かうして斬つた」）

さう、この右足はね、若い時、群馬でね、すばらしい馬がゐたので、一寸その馬に乗つた。ところがこの馬め大へんあばれて、わしは落ちた。それからどうも右足が悪くなつたと翁は云ふ。あアさうですか、その馬は群馬ですね、そして栃田でせうと云ふと、翁は黙した。私は更らに、小栗は陸軍奉行になると、直ちに洋式兵制を採り、洋式訓練をやらせた。それに、軍馬に目をつけ、仏国から軍馬を購入し、自分もこの馬に乗つたことは栗本の著述にある。小栗のアラビヤ馬でせうと私は云うた、翁はこれに答へなか

つた。さうだとも、さうでないとも云はなかつた。只だ回顧の想に耽つてゐるやうだつた。アラビヤ馬、然も小栗の愛撫乘用した駿馬、私は深く考へさせられた。馬のことについては、昔のいたましい思出を避ける為めこの上の追求は止めようと思つた。然し、小栗の馬であつたことは事実であつた。馬は亡き主人の情にかられたとも言ひ得よう。

（「小栗の駿馬に蹴らる」）

○「先生は、足が悪いのですね。御不自由でせう。」

「……。」

「中風ですか。」

「……。」

「温泉療法がいいさうですね。」

「さう、温泉はいいだらう。この右足はね、若い時上州で落馬してから悪くなつたよ。すばらしい馬がゐたので、ついその馬に乘つてみる気になつて、乘つたのだ。その馬が大変な駻馬でね、わしは落ちた。」

「上州ですね。そして、権田村でせう。」

「……。」

「小栗は陸軍奉行のとき、フランス人顧問について、洋式兵制を採用したさうです。騎兵の重要なことに着眼して、アラビア馬を数頭フランスから購入して、自分もアラビア馬に乘つてゐたさうです。これは栗本鋤雲の著書に書いてあります。先生を振り落した馬は、小栗のアラビア馬でせう。権田村に隠退するとき、小栗は騎馬で江戸を出発したといふことです。」

「……。」

御隠居が何も云はないので、私はすこし身を起し、部屋のなかの有様を窺ひました。御隠居は黙然としてゐるのです。たぶん上州権田村で、小栗から没収したものでせう。血気にまかせてそのアラビア馬に乘つて、落馬したものと思はれます。この御隠居は、若いころ剣術が上手で京都で師範をしてゐたといふことですが、馬術の心得はなかつたのでせう。しかし武人といふよりも官吏に向く人だつたやうに思はれます。維新前の騒ぎが起ると、岩倉の用心棒になつて江戸に出て、このかた岩倉の側人になつてゐた人です。その後、岩倉の洋行するとき随員として海外に行き、帰朝するとすぐに関西方面の県知事になつて、その県で二十年も知事をしてゐました。それから北海道長官になつて、日清戦争のころ退官すると勅選議員にされて、老境に及んでゐる人でした。好々爺といつたところがある反面に、目

や口もとに不屈の気性を偲ばせる厳しさが見えました。いかにも順境に生きて来た上層階級の御隠居さまの風貌でした。（「普門院さん」）

依拠資料の方には、見出しがついているために、一見形の上では整理されているかに見える。しかしそれはインタビューの会話をそのまま記録し、あとから読者に興味深そうな見出しを配しただけのようである。話の流れるまま、散るままに記録したもので、主題構築のための再構成意識は見られない。小栗の馬に盗られた話も、翁の悔悛を迫る方向に収斂していない。「この上の追求は止め」、「馬は亡き主人の情にかられた」のだという感傷に流してしまっている。

それに対して井伏は、同じ話を材料にしながら、御隠居への「追求」の手をゆるめていない。御隠居は、すでに政治から「隠退」している小栗を取調べなく、岩倉の命令に反して斬首したのみならず、その愛馬を「小栗から没収」し、落馬したのだと改めた。さらには、問いつめられた御隠居が黙して答えない沈黙の場面に、依拠資料の感傷を排除して、そのかわりに、御隠居の履歴を挿入した。沈黙の場面をのぞき見している「私」の立場からの思惑を入れたのである。御隠居の履歴は、依拠資料ではバラバラに配されていたものを、ここに一まとめに、時代順に紹介したもので、しかも、小栗の斬首後に絞って書いている。ちなみに、小栗上野介の履歴については、『海軍先覚者の小栗上野介正伝』にあるにもかかわらず、削除しているのである。御隠居の出世の足跡だけを紹介することによって、小栗を斬殺したことによって出世していった御隠居の生き方を批判しているものと思われる。井伏は、感傷文を批判的文学に組みかえたと言ってよいのではなかろうか。

このような操作は、作品全体に渡って、随所に見られる。次には、依拠資料にはないか、または反復されていないのに、「普門院さん」で反復強調されている例を見たい。

○ 幕臣といへども、兵器を持つて立ち向かはないものは、先生がたの東山道軍に対して、敵軍とも敵兵とも云へない筈です。それを襲撃して、何の調査もせず、ただちに斬りすてる。昔の記録にもただ（注、定本では「ただに」と改訂）斬りてけりといふ言葉がある。これは非道の行為を暗示する言葉だと思ひます。

○ 公文布達は一般人士の目に触れます。追捕せよと称して斬らしたのは、一般人士を瞞著愚弄したことにも通じないとは言へないでせう。しかも有無を云はせず、ただに斬りてけりでした。

『海軍の先覚者小栗上野介正伝』には、「ただ斬りてけり」も「ただに斬りてけり」も見あたらない。「ただ斬りてけり」は、「琵琶塚」（昭13・2）の中でも引用している。

「宮づかへ」には、この大納言の流されて来た年月を明らかにしてゐないが、佐々木中納言が甲斐の国に流されたのは、承久の乱のとき院の大業に参画したためである。承久記に「佐々木の中納言ありまさの卿は、小笠原具し奉りて、甲斐の国いなつみの庄なひこせ村といふ所にて斬らんとす。二位殿に申したる旨あり、その御返事今日にあらんずれば、今二時の命をのべ給へと宣ひけるを、ただ斬りてけり」と云つてある。（全集本文による。）

「普門院さん」に言う「昔の記録にもただ斬りてけり」とあるとしたのは、前に自作に引用した「承久記」を指すものであろう。前後の文章とは異質な古文、しかも実に簡潔非情な「ただ（に）斬りてけり」という一文を反復引用することによって、「何の調査もせず」、「有無を云はせず」、政治的に邪魔になる人を殺す行為の「非道」を鋭く批判したのである。

もう一例、あげてみる。

「それに上野介は、目立つほどの撫肩ちやつた。せんだつての写真を見て、わしはその撫肩に向けて刀を振りあげたのを思ひ出したことであつた。しかし上野介は一代の英傑ちや、わしは斬る前に、何か云ひ置きはないかとたづねた。ない、と云つた。はつきりとさう云つた。それから、しばらく目をつぶつてをつた。それから目をあけて、一言云つた。わしは、あの大きな目を見てをると、自分の心に狂ひが来るやうな気がしたのでね、云ふことがあるなら、早く云へと云つた。さうするとね、老母と妻を逃がした、よろしく寛典を乞ふと云つた。」

「遺言は、それだけでしたか。」

「さうだよ。それでわしは、うしろにまはつて刀を振りあげた。撫肩だなあと思ふた。（中略）上野介は頭をまつすぐにしてをるので、どうも斬りにくい。躊躇すると、心に狂ひが来るものだ。わしは気があせつて、うしろから上野介の腰を棒で突いて、首を下げろと云うた。すると、上野介は振り向いて、あの大きな光る目でわしをにらんだ。それから、ゆつくり向うにむきなほつた。それから、びつくりするほど大きな声で、無礼者め！と云うた。わしは、ぎくりとした。わしの心に狂ひがあつたのぢやろう、夢中で刀を振りおろしたが、三太刀も浴びせる不始末をした。忘れようと思つても、忘れられるものではない。（中略）

「それはね、それちやよ。つまり、一場の儚い夢ちやらう。やがては、いや、恩讐二つながら無しちや。しかし、あの大きな目、それから撫肩……あれが、わしの目にうつるのちや。」

依拠資料に、「そして、心のくるひであらう、その時三太刀で斬首したと告白した。」と一度だけ出る文を、「普門院さん」では、三回も「心に狂ひ」が来ることを反復強調している。それに呼応するように小栗の「撫肩」を四回反復している。「撫肩」についての言及は、『海軍の先覚者小栗上野介正伝』には無いのである。なぜ「撫肩」を「心に狂ひが来る」と呼応する形でくり返したのであろうか。

この場面に入るまで、「斬る」という言葉は、人を殺すという実感のない抽象的な言葉でしかなかった。ところが、この場面ではじめて、斬るという行為が、殺人というイメージを生ま生ましく伝える。「撫肩」にひるむさまをくり返すほどに、小栗が特定の肉体をもった人間として浮かび上がってくるからである。小栗はこの場面ではじめて生きた人間として意識されたのである。それまで小栗は、歴史上の人物として、御隠居と普門院さんとの会話に上っていた。小栗が斬られたのは過去の事実であった。御隠居の話しぶりも「殆んど無造作」であった。ところがここで、撫肩の男に刀を振り上げ、何度も「心に狂ひ」を感じさせることによって、殺人をリアルに表現することができた。個人の肉体的特性とそれが殺す側に与える影響を描くことによって、御隠居が、自分の手柄のために、何の調査もなく人を斬ったことの「非道」を、読者の心に「刻印」させているのである。

次には、依拠資料の叙述を、あえて削除している部分を見る。

それは、それちア、一場の儚い夢ちアらう。敵、味方なしちア。ただ、君国に奉じたのみちア。小栗は気の毒である。

井伏は、翁の言葉として「一場の儚い夢」、「敵、味方なし」という点は踏襲したが、「ただ、君国に奉じたのみ」という点は削除した。なぜか。井伏にとって、「君国に奉じ」るという思想は有害無用だったからではあるまいか。それを考えるにあたって、もう一箇所、小説では削除されている部分を依拠資料から引用したい。

あれから俺は驚いた。（中略）横須賀に立つた、えらい造船所が立派に出来てをる。きけば我国の手で軍艦を作る所だとのこと。小栗氏が創めたのだときかされた時には、小栗氏はどえらい人物であつたと思つた。（中略）翁は己

に横須賀湾頭に立つて我国海軍の発祥の大事業を見て、翻然として人生の行路と未来と云ふものに人間的悔悟を感じたらしい。

阿部道山の小栗上野介研究は、書名の角書きにもうたっているように、"海軍工廠の創設者"を中心としたものである。小栗の功績としては、他にも、金銀のレートを三倍にして海外流出を防いだり、商社の設立をはかったりするなど、経済方面にもめざましい働きがあるが、『海軍の先覚者小栗上野介正伝』には叙述がない。同書が刊行された昭和十六年は、日米開戦を前に軍国主義の時代であった。海軍の創始者としての小栗の功績を発掘し、賞揚することは、時勢にかなったことであった。しかも『海軍の先覚者小栗上野介正伝』の序文には、海軍大将岡田啓介、海軍中将都築伊七、殿には海軍大佐広瀬彦太らが名を列ね、海軍有終会から刊行された。また、小栗の菩提寺の住職として、朝敵小栗の汚名をすすぐことは、寺の名誉にもなる。戦争ムードの日本を景気づけ、海軍の発展を正当化し、一愛国思想を善導する」こと、あわせて、その国家的功労者の菩提寺に箔をつけることが、同書のねらいであった。寺と海軍という、ともに世間の支持を必要とするものが手を結んで刊行となった。

ところが、その肝腎の横須賀軍港の創設者の部分を、井伏は削除したのである。

それは、井伏は小栗を海軍の功労者としてまつりあげるために「普門院さん」を書いたのではなく、小栗斬首を手柄として出世した御隠居を批判し、政治のために虫けらのように斬り殺された小栗を悼むために書いたものだからであろう。「君国に奉じ」るという思想を削除したのも、ここに絞りこむためであったと思われる。

三　歴史と現世の噛みあい

『海軍の先覚者小栗上野介正伝』は、「歴史」について、次のように述べている。

○　時の勝利者側にのみ史料の重点を置くと云ふことは、人間として明治初年間はいたし方あるまいと考へられるが、然し今日、昭和の聖代に至るまで、過去の蒙を伝承すると云ふことは許し難きことである。

○　慶応四年四月六日上野介が江戸を引払ひ、この普門院に立寄り（中略）群馬の知行所たる高崎在権田村東善寺に盤居後、官軍原保太郎氏に罪なくして斬首せられ、その上官軍は無法な梟首をなし、逆賊の宣伝に是れ勗めた。（中略）村民はこの誤つた宣伝を信じた。先祖の塋域は誰となしに

破壊された。（中略）大猷和尚はこの誤れる官軍の手に依つて殺害された。

○　歴史も勝利者側に便利の様に書かれ、これを真なりと国民に伝へる時代はすぎた。ありのままの実相を伝へ国民的愛国思想を善導するのが歴史家である。勤王、勤王と猫も杓子に対しても誇称し讃するのは国を誤ることになる。

道山は、「時の勝利者側にのみ史料の重点を置」いた歴史は誤れる歴史である、「勝利者側に便利の様に書かれ、これを真なり」と押しつける歴史を排して、「ありのままの実相を伝へ」るべき時代が来たと書いている。歴史の本質を突いている指摘と言える。だが、敗者の側の史料を発掘して、歴史の実相を明らかにするのは、「国民的愛国思想を善導する」ためであるとしていることに注意せねばならない。愛国思想の善導とは、帝国海軍の軍事力増強を正当化し、国民に宣伝することではないだろうか。同書には次のように書かれている。

○　帝国海軍の必要は今更云ふまでもあるまい。（中略）日、満、支の一体運用を保証するは実にこれらの連絡を確保するに十分なる海軍力に依らねばならない。海軍は我国の生命である。海上権の確保は、帝国の消長である。幕末に於て僅に数隻にすぎないオランダ建造の軍艦を以て初められた海軍は、小栗の創設したる横須賀造船廠に依つて、我が海軍力を推進し、今日の無敵海軍構成に偉大なる中心力をなしたと云ふべきである。

阿部道山は、小栗上野介の汚名を雪いで、歴史の実相を明らかにしただけではない。自らも軍国主義の立場に立って、海軍の先覚者、横須賀軍港創設者という像をつくった、別の歴史をつくったと言えるのではないだろうか。

それに対して、「普門院さん」では、「歴史」についてどう述べているだろうか。

小栗の最期は何か暗示的なやうな気がします。それは書いた歴史や装装した額の大文字の真意（定本では「文意」）に対して、疑ひを持たせるといふ点で暗示的だといふ意味です。坊さんが御隠居にさう云つてゐたのですが、小栗は幕末のころ福沢諭吉に新聞を発行させる計画をたて、それを誰も相手にしないので目的を果さなかつたといふことです。もしもその計画が実現してゐたら、新聞の社説欄か匿名の投書欄に、当時の真相が掲載されたことでせう。案外なことが書いてあるかもしれません。公武の秘密も生々しく暴露されてゐることでせう。もしかしたらその新聞社に浪人風の士が来て、編集長に一太刀あびせた上、活字

箱をひつくりかへして行つたかもしれないのです。

歴史は時の勝利者によって作られたものであるという認識においては、阿部道山と一致している。だから歴史に対して疑いを持てと井伏は言っている。しかし、一代の英傑小栗上野介の実像を伝えるものとして、海軍の先駆者ではなく、新聞界の先駆者をあげている。これは『海軍の先覚者小栗上野介正伝』の他の章にあるわけだが、依拠資料として集中的に用いている「上野介を斬った原保太郎翁と語る」のところにはない。それをわざわざ入れたということは、井伏が、小栗の新聞発行計画に、言論出版の自由の問題をこめたからではあるまいか。冒頭の「歴史と現世は二つの歯車のやうに嚙みあってゐます」ということばが思い起こされる。

「普門院さん」が発表された時勢に注目してみると、翌昭和二十五年六月の朝鮮戦争勃発をひかえ、騒然とした時代であった。共産党と労働運動を弾圧するレッド・パージが行なわれた年であった。井伏は、新聞発行計画の話をわざわざ「普門院さん」の中にとりこむことによって、言論の自由を守ること、本当のことを知る権利があることを自覚すべきだと言おうとしているのではあるまいか。

また、「普門院さん」発表の少し前、国会で喚問される程世間で話題となった事件が執筆のきっかけになったのかもしれない。それは吉村隊事件という。戦後、外蒙に抑留されていた日本人部隊の中で起こった事件である。当時日本人部隊に課せられた膨大な石切り作業のノルマを、それが可能かどうかも考えずに、上部の人間に認められたいがために、上からの命令のまま部下にやらせようとして、命にかかわるほどのリンチを加えていた吉村という隊長の行動が、日本へ引揚げてから、問題とされた事件である。

昭和二十四年三月二十六日『朝日新聞』の社説には次のように述べられている。

われわれは何よりも吉村隊長の行動に強いにくしみを覚える。が、それよりも苦しみをともに分つべき環境に追いこまれた日本人たちの間で、多くの人間性をふみにじりつゝ極めて限られた少数者が、豊かな生活を享楽したという事実に何か救われない深い悲しみを感じざるを得ない。

（中略）終戦後においても本庄町で福島市で銚子市で表面化した事件はこれと同じ類型に属するものである。（中略）

「いま思えば、彼の非行をあばくため、なぜ捕虜たちが團結しなかったかゞ不思議だが、だれも自分をすてゝ多数の利益に立つという氣がかけていた。」腕を失った吉川隊員

のこの言葉をかみしめて見たい。

「普門院さん」と吉村隊事件とには二つの共通点がある。まず一人の権力者が自分の利益のために個人の人権や命を軽視して自分よりも立場の弱い者を利用していた点。もう一つは、下の者が上の者から命じられたことを絶対として従うのみであった点である。戦後の民主主義によって、吹き払ったはずの軍国主義が、抑留地とはいえ、戦時中そのままに再現したようなこの事件は、当時の日本のあり方も問い直している。無論、井伏が吉村隊事件に強い関心を抱き、それに触発されて、「普門院さん」を書いたという証拠は今のところないわけだが、蓋然性としてあげてみたのである。井伏は、「普門院さん」の中で、一部の者が享楽や手柄を得るために暴力や絶対服従の関係がまかり通っている中で、それをはねとばす力として、新聞の力というものをあげたのではないだろうか。言論の自由を守り、世論をまとめるものとして新聞発行の話を挿入したのではないだろうか。思想弾圧の時代の再来を、「新聞社に浪人風の侍が来て、編集長に一太刀あびせ、活字箱をひっくりかへして行つたかもしれません。」という叙述によって暗示したとするならば、世相の不安定な昭和二十四年にあって井伏が発した警告として、「普門院さん」は書かれたと受けとめることができよう。

〔付記〕　井伏鱒二の文献については、同志社大学教授加美宏先生に、本学御在職中『試験監督』他の御蔵書を借覧させて頂くなど、大変お世話になった。記して深謝の意を表したい。